

『三国志演義』における呼称の不統一

小 松 建 男

A はじめに

『三国志演義』¹⁾においては、呼称、つまり登場人物をどのように呼ぶかが、時々混乱する。一人の人間に対する呼び方が多様であること自体はおかしなことではない。現に我々も、同じ相手であっても、その場面、たとえば、公式の場、私的な会話など、あるいは情況、たとえば、自分と相手との関係、相手の地位などの変化によって呼び方を変える。しかしそれは場面や情況に応じてどのように呼ぶかを選択しているのであって、無原則に呼び方を変えているわけではない。

『三国志演義』にも、原則はあり、相手に対し好意的な気持ちをもっていたり、味方と思っているときは官職名や字で呼び、嫌悪していたり敵と見なしているときは姓名を呼び捨てにするとする呼称の使い分けは存在している。しかし時として、同じような場面・情況であるにも関わらず、異なった呼び方をしている。時には一つの台詞の中で一人の人物に複数の呼び方を使うことさえあり、場面・情況に応じて呼び方を選択するのとは異なる。そこにあるのは、不統一であって多様性ではない。

『三国志演義』における呼称の不統一の例として、最もわかりやすいのは、叙述における不統一である。『三国志演義』の語り手は、登場人物を姓名か名で呼ぶのを原則としている。語り手が姓名で呼ばない人物は、劉備、諸葛亮、関羽、趙雲、曹操の五人²⁾である。曹操以外の四人については、語り手が彼らに対し敬意をもっているので、姓名以外の呼び方を選ばせたと考えられる。四人の内、諸葛亮は一貫して字で呼ばれ、劉備ははじめ字で、その後帝位に就くと「先主」と呼ぶというように、地位に応じて呼び方を変えているので、この二人については、語り手がなぜそのように呼んでいるのかは説明がつく。ところが、関羽は字の「雲長」の他に「関公」・「関某」と呼び、趙雲は字の「子龍」の他に「趙雲」と姓名で呼ぶのであるが、関羽をなぜここでは「関公」とよび、

あちらでは「雲長」と呼んでいるのか、同様に趙雲をここで「趙雲」と呼び、あちらで「子龍」と呼ぶのかについて、合理的な説明はつけ難い。関羽と趙雲の呼称が統一されていないことについては既に触れたことがある³⁾。残る曹操にも、呼称の不統一が見られる。彼は「曹操」とも呼ばれるが「曹公」と呼ばれていることもある。たとえば「玄德匹馬奔冀州」(5,46a-51a)は、5箇所「曹公」と呼ばれている(「却説曹公分兵五路」,「却説曹公因大軍往小沛來」,「曹公馬前忽一声響亮」,「張飛兵原來舊是曹公管的」,「却被曹公自引精兵當住」)。この箇所、「曹公」ではなく「曹操」と呼んでいる例も混在しているが、どう見ても「曹操」と「曹公」が意図的に書き分けられているとは考えられない。

叙述における不統一は、主に上記四人に過ぎないが、台詞に至っては、注意して読めば至る所に不統一を見いだすことができる。以下では、台詞の中から呼称の使い分けと不統一を区別し、その上で呼称の不統一がどのような原因で発生したのかを分析してみたい。

なお、呼称の不統一は、『三国志演義史伝』⁴⁾(以下『史伝』と略称)も視野に入れると話は更に複雑になる。『史伝』では、今挙げた5例の「曹公」が皆「曹操」か「操」になっている。もちろん全体としてみれば嘉靖本と『史伝』の呼称に大きな違いは無いが、このように一部嘉靖本と『史伝』の間で使っている呼称が異なる箇所が存在している。嘉靖本と『史伝』の本文は、どちらも本来の姿をそのまま伝えているわけではなく、時に『史伝』の方が、嘉靖本より古い姿を伝えている箇所もあることは既に指摘したとおりである⁵⁾。呼称については、全体としてみれば、相違がそれほど多くないので、今回は嘉靖本をもとに呼称の不統一の検討をおこない、『史伝』については必要に応じて違いを指摘するのみにとどめることにする。

B 緩やかな統一

呂布と陳宮は、『三国志演義』のはじめに曹操のライバルとして活躍するが、いよいよ曹操に追い詰められ降伏を勧告された場面(4,60ab)は次のようになっている。

- 1 布曰：「丞相且退，尚容商議。」陳宮在布側大罵操曰：「汝是欺君之賊，反欲毀他人也。」言罷一箭射中塵蓋。操指而恨曰：「吾誓殺汝。」遂引兵攻城。布曰：「曹丞相相容我自首，當拜投於明公。」陳宮變色大怒曰：「逆罪曹操，何等之人。今日若降，如雞子投石，豈得全乎。」

これを見ると、城を囲む曹操の軍を前に、呂布と陳宮は樓上にいて並んで対面しているにもかかわらず、二人の間で曹操の呼び方が異なっている。この違いは、作者が、二人のこの時の心理状態の違いを示すため、意図的におこなった呼称の使い分けである。呂布は曹操と敵対しているが、降伏に気持ちが傾いており、直接曹操に対してのことでもあって「曹操」と言わず「丞相」・「明公」と呼びかけている。一方呂布の隣にいる陳宮は、降伏する気がないので、曹操を敵と見なし「汝」・「曹操」と言っている。細かいことを言えば、陳宮の二つめの台詞は呂布に向かって言ったもので、直接曹操に言ったものではないが、彼の面前で「曹操」と呼び捨てにしていることには変わりはない。

この場面の前後でも、このような呼称の使い分けは行われている。曹操の側の人物なら彼を「丞相」⁶⁾と呼び、敵対する側の人物なら「曹操」と呼ぶ。劉備もこの時曹操の陣営にいるので、公式の場ではやはり「曹操」ではなく「丞相」と呼んでいる。たとえば曹操に出兵を命じられた場面で、曹操に向かって「丞相將命安敢有違」(4,59a)と答えている。しかしその少し後、曹操がいない場面での張飛との会話では、「曹操統數十萬雄兵」(4,64a)と言っており、相手と場所により使い分けをしている。

したがって呂布が曹操を「丞相」と呼んだのは、この前後における呼称の使い分けと対応するものであるが、二つめの台詞の最後に一箇所でてくる「明公」は、ここで突然出てきた呼称である。例1の前半や、この前後の呼称の使い分けに従えば、ここも「當拜投於丞相」という方が自然であり、ここのみ「丞相」を使わず「明公」と言っているのは呼称の不統一である。

この一箇所のみが「明公」である理由は、『三国志』「呂布伝」にある。『三国志』「呂布伝」には、例1の前半に対応する文章は見あたらないが、後半は注に、例2のようなよく似た文章がある⁷⁾。

2 及太祖軍攻之急，布于白門樓上謂軍士曰：「卿曹無相困，我自首當明公。」

陳宮曰：「逆賊曹操，何等明公。今日降之，若卵投石，豈可得全也。」

これをみれば明らかのように、史書の「卿曹無相困，我自首當明公。」が小説の「曹丞相相容我自首，當拜投於明公。」に、また「逆賊曹操，何等明公。今日降之，若卵投石，豈可得全也。」が「逆罪曹操，何等之人。今日若降，如雞子投石，豈得全乎。」対応しており、例1の「明公」は、この史書の呼称をそのまま踏襲した結果であって、意図的な書き分けではない。

しかし、史書の呼称であれば全てそのままなのではない。例1に引用した箇所のすぐ後で、陳宮は呂布に次のような献策を行っている。

- 3 「曹操遠來，勢不能久。若將軍以步騎出屯爲勢於外，宮將餘衆閉守於內。操若攻將軍，宮引兵擊其背。若來攻城，將軍爲救於後。不過旬日，操軍食盡，可一鼓而破。此乃犄角之勢也。」

この箇所も次のように『三国志』⁸⁾に拠り所がある。

- 4 「曹公遠來，勢不能久。若將軍以步騎出屯，爲勢於外，宮將餘衆閉守於內，若向將軍，宮引兵而攻其背，若來攻城，將軍爲救於外。不過旬日，軍食必盡，擊之可破。」

例1と異なり，例3では，例4の「曹公」は「曹操」に書き改めている。

例2の「明公」は「丞相」に書き換えられず，例4の「曹公」は「曹操」に書き換えられたのは，呂布と陳宮が曹操をどう思っているかの違いである。例3の場合敵である曹操を「曹公」というのは妥当ではない。ところが例1の場合，降伏しようとしている呂布は既に「丞相」と曹操を呼んでおり，「明公」は，「丞相」と同じように相手にたいする敬意を示すはたらきをするのでそのままにされたのである。作者は，台詞に限れば，「曹公」（好意的）と「曹操」（敵対的）のように自分が使用している呼称と，資料の呼称が対立する機能を果たす場合は書き換え，「明公」と「丞相」のように同様の機能（好意的）をもつ場合は，もとの資料にあった呼称をそのまま使用し，強いて自分の使用している標準的な呼称に統一しないという，緩やかな統一で満足していると考えられる。

なお『史伝』（2,54a）では，嘉靖本の例1に該当する箇所が次のようになっており，『史伝』のほうが『三国志』の本文に近い。

- 5 布曰：「丞相且退，尚容商議。」陳宮在布後大罵操曰：「汝是欺君之賊，反欲毀他人耶。」言罷一箭射中麾蓋。操指而恨曰：「吾誓殺汝。」遂引兵攻城。布曰：「卽丞相困，我自首當明公。」陳宮變色大怒曰：「逆罪曹操，何等明公。今日若降，如將雞子投石，豈可得全也。」

この中で嘉靖本の「曹丞相相容」が『史伝』で「卽丞相困」となっているのは，この箇所が，『三国志』→『史伝』→嘉靖本と変化したことを示すものである。この箇所『三国志』では「卿曹無相困」である。『史伝』の「卽」は「卿」に，「丞相」は「曹無相」に対応すると思われる。恐らく『三国志演義』の原本は，『三国志』と同じく「卿曹無相困」であったに違いない。ところがある時期に，これを「卽曹無相困」と書き誤り，もとの「卿曹」ならば「卿等よ」と相手に呼びかけたことになるが，「卽曹」となってしまったことで，「卿」から切り離された「曹」が，意味不明となり，これを「曹無相」と続け，「曹相」

あるいは「曹丞相」と誤った解釈をした結果、『史伝』の本文「卽丞相困」が生み出された。ところが「卽丞相困」では意味が分かりにくい。そのまま訳せば、「もしも丞相が（私を）苦しめるなら」と言った意味であろうか。そこで、嘉靖本は意味が通りやすいように、本文を改め、最も『三国志』の本文から遠い「曹丞相相容」となったと考えられる。

例1をもとに、呼称の不統一について緩やかな統一と言う原則を提出したのであるが、これは、小さな場面に過ぎず、史書の呼称を踏襲した箇所も一箇所所有のばかりである。はたしてもっと長い一段においてもこの原則は守られるのであろうか。以下では、より長い二つの場面を例にとってこの点について検討してみたい。

一つめは「白門曹操斬呂布」(4, 60b-72b) 中にある呂布と陳宮の最後を描いた場面。この場面は、『三国志』「呂布伝」の文章を多量に取り込んでいるので、以下『三国志』との対応に注意して、細かく段落に分けながら分析してみることにする³⁾。

まず陳宮が曹操の前に引き出されてくる箇所。ここは『三国志』に対応する文章がない。曹操は、陳宮を人称代名詞（「爾」）と字（「公臺」）で呼び、陳宮は曹操を人称代名詞（「汝」、「你」）で呼んでいる。

6 押過陳宮來。操問曰：「公臺自別來無恙。」宮曰：「汝心術不正，吾故棄之。」操曰：「吾心不正，爾如何事呂布。」宮曰：「布雖無謀，不似你詭詐姦雄也。」

例6に続く箇所。ここでは陳宮は、「公臺」か「卿」と呼ばれ、曹操は「明公」と呼ばれる。

7 操曰：「公臺自謂足智多謀有餘，今竟如何。」宮顧呂布曰：「但此人不從吾言。若從吾言，亦未必被擒也。」操笑曰：「今日之事當如何。」宮大聲曰：「爲臣不忠，爲子不孝，死自甘心也。」操曰：「卿如是，奈老母如何。」宮曰：「吾聞將以孝治天下者，不害人之親。老母之存亡，在於明公也。」操曰：「若卿妻子何如。」宮曰：「吾聞施仁政於天下者不絕人之祀。妻子之存亡亦在於明公也。」操有留戀之心。宮曰：「請出就戮以明軍法。」遂步下樓，牽之不住。操起身泣而送之。宮並不回顧。

この箇所、陳宮からすると、妻子と老母のことを曹操に頼む場面なので、さすがに「汝」や「你」とは言いにくいかもしれないが、曹操は陳宮を「卿」と呼び変える必要はなく、字の「公臺」と呼び続けてもおかしくないはずであるのに、そうしなかったのは、次に引用する『三国志』³⁾のそれを踏襲したため

である。

- 8 太祖謂宮曰：「公臺，卿平常自謂智計有餘，今竟何如。」宮顧指布曰：「但坐此人不能宮言，以至於此。若其見從，亦未必爲禽也。」太祖笑曰：「今日之事當云何。」宮曰：「爲臣不忠，爲子不孝，死自分也。」太祖曰：「卿如是，奈卿老母何。」宮曰：「宮聞將以孝治天下者不害人之親，老母之存否，在明公也。」太祖曰：「若卿妻子何。」宮曰：「宮聞將施仁政於天下者不絕人之祀，妻子之存否，亦在明公也。」太祖未復言。宮曰：「請出就戮，以明軍法。」遂趨出，不可止。

例7の少し後に、次のような呂布の最後の場面が続くが、ここでも呂布は曹操を「明公」と呼んでいる。

- 9 操知其意，令人押過呂布來。布叫曰：「明公所患不過於布。布今已服。天下不足憂矣。明公爲步將，布爲騎將，天下不足慮矣。」操回顧玄德曰：「呂布欲如何。」玄德答曰：「明公不見丁建陽，董卓乎。」操領之。布目視玄德曰：「是兒最無信者。」操遂令牽布下樓縊之。布回首玄德曰：「大耳兒。不記轅門射戟時。」

これも例10に引用する『三国志』「呂布伝」の「明公」を踏襲している。『三国志』で「董卓」と呼ばれている董卓が、例9では「董卓」と呼び捨てになっているのは、小説の中では皇帝をないがしろにした悪人と見なされているためである。

- 10 布請曰：「明公所患不過於布，今已服矣，天下不足憂。明公將步，令布將騎，則天下不足定也。」太祖有疑色。劉備進曰：「明公不見布之事丁建陽及董卓乎。」太祖領之。布因指備曰：「是兒最巨信者。」於是縊殺布。布與宮，順等皆梟首送許，然後葬之。

この箇所は、次のように『三国志平話』¹¹⁾にもほぼ同じ内容が見える。こちらでは、曹操は常に「丞相」と呼ばれており、『三国志演義』よりもこちらの方が一貫している。逆に言えば、『三国志演義』のような、場面による細かい使い分けは考えられていないと言うことでもある。

- 11 衆將拿住，把呂布囚了。曹操使人高叫八將並衆官等都來受降。曹操班師，入寨升帳而坐，問衆官，令人將呂布，陳宮執於當面。問陳宮曰：「爾先歸我，後投公孫瓚，又私遁奔呂布，今事失如何。」陳宮笑曰：「非某之過。先殺丞相，常懷篡位之心，後見公孫瓚爲事外，訛再投呂布。怎知賊子反亂。今日被捉，惟死者當也。」操曰：「免你如何。」陳宮自言：「不可。先投公孫瓚，又歸呂布，再投丞相，後人觀我無義，自願就死。」

丞相言：「當斬陳宮，放其家小。」陳宮高叫「丞相錯矣。倘留其子，必遺後患。惟母與妻，願言寬恕。」曹操令斬訖，留其母妻。

再令推過呂布至當面。曹操言：「視虎者不言危。」呂布觀帳上曹操與玄德同坐。呂布言曰：「丞相倘免呂布命，殺身可報。今聞丞相能使步軍，某能使馬軍，倘若馬步軍相逐，今天下易如翻手。」曹操不語，目視玄德。先主曰：「豈不聞丁建陽，董卓乎。」

曹操言：「斬，斬。」呂布罵：「大耳賊，逼吾速矣。」曹操斬了呂布。

次に、あまり史書を利用していない場合でも、緩やかな統一は守られるのかを見るために、「青梅煮酒論英雄」(5, 1a-10a) から、曹操が劉備と当世の英雄について論ずる場面を取り出して見てみたい。

この一段全体を見ると、作者による呼称の使い分けがかなり徹底されており、劉備は、基本的には「玄德」、「劉備」のいずれかで呼ばれる。

次に示す例12は、劉備が曹操の家で酒を酌み交わしながら当世の英雄について論ずる場面の前半である。この時、曹操は劉備に好意的であるので、曹操配下の武将である許褚、張遼も劉備を「玄德」¹²⁾と呼んでいる。

- 12 次日，關，張不在，玄德正澆菜。許褚，張遼引數十騎慌入園中曰：「丞相有命，請玄德便行。」玄德問曰：「有甚緊事。」許褚曰：「不知。只教我來請玄德。」玄德只得隨二人入府。曹操正色而言曰：「在家做得好事。」謊得玄德面如土色。操執玄德手，直至後園曰：「玄德學圃不易。」玄德方纔放心，答曰：「無事消遣耳。」操仰面大笑曰：「適來見枝頭梅子青青，(中略)今見此梅，不可不賞。又值缸頭煮酒正熟，故邀賢弟小亭一會以賞其情。」玄德心神方定。

曹操は途中から、「賢弟」といつているが、これは劉備が、呂布におわれ、曹操のもとに身を寄せた時に「玄德吾弟也」(4, 12b) また、劉備が皇帝から皇叔と認められた箇所でも「玄德與吾結爲昆仲」(4, 75a) と曹操が言ったことを受けたもの。ただなぜ弟扱いするのかその理由は不明である。

ところが、この段の最後で劉備が口実を設け曹操のもとから逃れようとする時、曹操の謀臣たちは、皆反対する。彼らは劉備を曹操にとって望ましくない人物とみなしているので「劉備」と呼ぶ¹³⁾。程昱の台詞を例にとれば、次のようになっている。

- 13 昔日劉備爲豫州牧時，某等苦諫。丞相不聽。今日又與之兵，乃放龍入海，放虎歸山。後欲治之，其可得乎。

この段では、曹操をどう呼ぶかも場所によって使い分けられている。次の例

14では、劉備が曹操に呼ばれて行ったたと聞いて、関羽と張飛が、心配して曹操のもとへととんできた時、曹操の面前なので、関羽は曹操を「丞相」と言っているが、曹操のもとからかえってきて三人になると、劉備は関羽張飛に向かって曹操のことを「曹操」と呼んで「丞相」とは言っていない。

14 雲長答曰：「聽知丞相和兄飲酒（後略）」操知其意（中略）玄德曰：「（前略）曹操奸雄之輩（後略）」

このように、かなり注意深く書き分けがなされている中で、唯一の例外は、次の例15である。

15 忽陰雲漠漠驟雨將來。（中略）操曰：「賢弟知龍變化否。」（中略）操以手先指玄德，後指自己曰：「方今天下惟使君與操耳。」言未畢，玄德以手中匙筋盡落於地。霹靂雷聲大雨驟至。

この箇所は、例12の続き、つまり曹操と劉備が酒を酌み交わし当世の英雄について論ずる場面の後半にあたる。したがってはじめの方で曹操は、劉備のことを、例12の後半と同じく「賢弟」と呼んでいる。ところが最後の方で「使君」に呼び方が変わる。この段で劉備を「使君」と呼んでいるのはここだけである。

劉備を「使君」と呼ぶのは、この曹操の台詞が『三国志』「先主伝」の、次の台詞を踏襲したためである。

16 先主未發。是時曹公從容謂先主曰：「今天下英雄，唯使君與操耳。本初之徒，不足數也。」先主方食，失匕箸。

これを見れば、例15は、全体が例16のきわめて短い文章を敷衍したものであることがわかる。はじめに雨が降ってきたとある（「忽陰雲漠漠驟雨將來」）のは、あとで玄德が曹操の言葉に驚いて箸を落とした時に、雷が鳴る（「霹靂雷聲大雨驟至」）という設定のために作者が張った伏線である。また引用に当たり例15は途中かなり長い省略をした。そこでは、袁紹等が当世の英雄とは言えないことを、『三国志』の他の箇所の文章を利用して詳しく述べている。これは、例16でいうと、台詞の後半にある「本初之徒，不足數也」に対応する。このように、例15は、作者により一続きの話として構想されている。したがって我々の常識に従えば作者は、当然自らたてている呼称の原則に従って登場人物を呼ぶと予想する。劉備なら、例12からの流れを考えれば、例15の最後も「方今天下惟賢弟與操耳」がふさわしく思われる。しかし『三国志演義』の作者は、依拠した資料が使用していた呼称をできればそのまま残し、緩やかな統一で満足している。

以上比較的長めの場面を二つ例にとって検討してみた。呂布・陳宮の最後の

ように大きく史書の文章に依拠している場合でも、この場面全体が史書に用いられている呼称で統一されることはなく、また曹操が劉備と英雄を論じた場面のようによ依拠した史書の文章が大変短くとも、史書に基づく箇所まで作者の呼称が侵入してしまうこともなく、はじめに提示した緩やかな統一と言う原則は、かなり堅固に守られていると言えよう。

但し『三国志演義』に見られるこのような緩やかな統一も、何時までも保存されるものではなく、やがて消え去る運命にあった。17世紀に刊行された毛宗崗本になると、現在の我々が感じるのと同じように、これらは不統一と見なされたようで、本文に挙げた箇所は、次のように皆書き換えの対象になっている。

例1は、毛宗崗本で見ると¹⁴⁾、

17 布曰：「丞相且退，尚容商議。」陳宮在布側大罵曹操奸賊，一箭射中其塵蓋。操指宮恨曰：「吾誓殺汝。」遂引兵攻城。

となっていて、「明公」を含む台詞が削除されている。

例6～8にかけては、陳宮は字か「公」、曹操は「明公」に統一されている¹⁵⁾。

18 徐晃解陳宮至。操曰：「公臺別來無恙。」宮曰：「汝心術不正，吾故棄汝。」操曰：「吾心不正，公又奈何獨事呂布。」宮曰：「布雖無謀，不似你詭詐奸險。」操曰：「公自謂足智多謀，今竟何如。」宮顧呂布曰：「恨此人不從吾言。若從吾言，未必被擒也。」操曰：「今日之事當如何。」宮大聲曰：「今日有死而已。」操曰：「公如是，奈公之老母妻子何。」宮曰：「吾聞以孝治天下者，不害人之親。施仁政於天下者，不絕人之祀。老母妻子之存亡，亦在於明公耳。吾身既被擒，請即就戮，並無挂念。」操有留戀之意。宮徑步下樓，左右牽之不住。操起身泣而送之。宮並不回顧。

また、例12と15に該当する箇所でも、「玄德學圃不易。」を除き、残りは全て劉備を「使君」と呼んでいる¹⁶⁾。

ただし例12、15が「使君」に統一したことは適切な処置とは言えないように思われる。曹操の部下である許褚、張遼については、劉備が主君の大切な客人であり同輩ではないので、「玄德」ではなく「使君」と呼んだ方が適切かもしれない¹⁷⁾。しかし曹操は、後に関羽を引き留めようとした話などから分かるように、才能有る人物を愛する人間として描かれている。彼が劉備を「賢弟」と呼んで兄弟扱いしたのは、劉備を自分に敵対する人物とは夢にも思わず、疑うどころかその才能を評価し心を許しているからである。したがって「使君」とあらたまつた呼び方でなく、「賢弟」と親しげに呼びかけてこそ、劉備を自宅に招いて、当世の英雄はあなたと私だけと言ってこそこの場面も生きてくる。

毛宗崗が、「玄德」、「使君」、「賢弟」の三種類の呼称の中から、たった一回しか使われていない「使君」を選んで統一し、他の二つを捨てたのは、こちらの方が、劉備に対する敬意を強く示せると考えたからであろう。しかしより強い敬意が必要と考えたのは、実を言えば、毛宗崗自身の劉備に対する評価からでたものである。毛宗崗は、『三国志演義』の本文を整える作業の一貫として呼称の不統一を直すつもりであったのであろうが、曹操の台詞の「賢弟」を「使君」に変えたことは、曹操の劉備に対する評価を自分のそれで書き換えることになり、登場人物にあわせた呼称の書き分けという本来の意図に背く結果となってしまっている。

C 誤写の累積

この節では史書に拠り所が無い箇所の不統一について、それがなぜ発生したのかを検討してみたい。取り上げるのは、赤壁の戦いの前段、孫権のもとに曹操から降伏を勧告する手紙が届いたところ（9, 36a）から、和戦両様の議論を経て最後に周瑜の意見に従い戦いを決意するまでの、かなり長い一連の話（9, 63a）である。

ここでは、呉の文官武官たちが、和戦いずれがよいか議論を続けるのであるが、降伏を主張する和平派は「曹公」、戦うことを主張する主戦派は「曹操」と、呼称の使い分けようとしている。たとえば次の場面（9, 52b-53a）。

19 張昭得知孫權興兵，遂與眾議曰：「中了孔明之計。」急入見權，昭曰：「某等聞主公將興兵與曹公爭鋒。主公自思比袁紹如何。」權不答。昭又曰：「曹公向日兵微將寡，尚能一鼓克袁紹。何況今日擁百萬之眾南征，足食足兵，威名大振。焉可敵之。休孔明之說詞，妄動甲兵，此所謂負薪救火也。」顧雍曰：「劉備數敗，與曹公有讐。故相伐之。江東自來無冤，安有併吞之意乎。休信孔明之言，免生國家之患。主公自察焉。」孫權亦不答。起身入後堂。魯肅見張昭等一班兒出，料是諫休動兵。慌入見權曰：「却纔張子布等又諫主公休要興兵，是要投降於曹操。文官皆欲降者，有嬌妻嫩子，大廈高堂戀以富貴，安肯就白刃而爲主公死也。」

孫権は、孔明の話聞き、曹操と戦うことに心を決めていた。引用した文章の前半では、それを知って、和平派が戦うことの不利を孫権に会って主張しているが、そのとき張昭と顧雍は、合計して三回「曹公」と言っている。後半では、張昭等の動きに気づいた主戦派の魯肅が、戦うべきことを主張しているが、こ

の場合は「曹公」ではなく「曹操」と言っている。

和平派と主戦派はどちらも最後まで意見を変えないので、上記呼称書き分けの原則が貫徹されていれば、登場人物たちは、その立場に応じて「曹公」または「曹操」どちらか一方のみを使うはずである。しかし主戦派の周瑜、和平派の張昭、薛綜の三人は「曹公」と「曹操」どちらも使っている。

前節で緩やかな統一と言う考えを提出したが、それは二つの呼称が同等に機能する場合である。曹操に好意的な「曹公」と敵対的な「曹操」の混用については、緩やかな統一という説明は適用しがたい。緩やかな統一でないとすれば、この三人が二つの呼称を混用している理由は一体なぜなのかということを以下で検討してみたい。

まず周瑜の場合。孫権のいる柴桑に周瑜がやってくると、彼の意見が孫権に大きな影響力を持つと知っているので、和平派主戦派ともに彼のもとに自分の主張を述べにくる。周瑜は主戦派の程普たちがやってくると、私も戦うべきと思うと言う。この時は曹操を「曹操」と呼んでいる(9, 55a)。

20 普曰：「今君侯聽謀士之言，欲納降曹操。(中略)」黃蓋昂然而起，以手舉其額曰：「吾頭寧斷，誓不降操。」韓當等齊應之曰：「不降。」周瑜曰：「吾正欲與曹操決戰，誰肯投降。請諸將暫回。瑜自有定議。」程普等別去。

ところがそのあと魯肅がやってくると、今度は曹操に降伏すべきだと言いだし魯肅を驚かせる。この時は「曹公」である(9, 55b)。

21 肅先問瑜曰：「今操驅眾南侵，吳主不能決，一聽於將軍。將軍意下安在哉。」瑜曰：「今曹公興兵以天子為名，師不可拒。(中略)戰則易敗，降則易安。吾已主定。來日見討虜遣使納降。」

この例21で周瑜が「曹公」と言っているのは、彼が本心を偽り和平派のふりをしたからであり、この使い分けは作者が意図的に行ったものである。彼は、孔明とともに赤壁の戦いを主導することになる人物であり、はじめから戦うつもりでいる。しかし作者は、彼に、相手によって戦うべきだと言わせたり、あるいは降伏すべきだと言わせたりしてなかなか本心を明かさせないことで、周瑜の決断や如何に(当然それは呉と連帯して曹操と戦うという孔明の目的が達成されるかどうかということでもある)と読者の興味を引きつけようとしているのである。

次に張昭と薛綜の場合。この二人の場合なぜ「曹操」と「曹公」を混用しているのか説明がつかない。

次の二例は、呉の文官と孔明が論争したときの張昭と薛綜の台詞である

(9, 38a-46a)。毎

- 22 昭曰：「近聞劉豫州三顧先生於草廬之中，而聽高論。豫州如魚得水，每欲席捲荆襄。今一旦以屬曹公，未審是何主見。」孔明自思張昭乃孫權手下一個謀士，若不先難倒他，如何說得孫權。遂答曰：「吾觀取漢上之地，易如反掌。吾主劉豫州躬行仁義，不忍奪同宗之基業，故力辭之。劉琮孺子，聽信佞言，暗獻國投降，致使曹操得以猖獗。(後略)」昭曰：「若此，先生言行相違也。(中略)今曹操橫行於中國擅行征伐，動無不克(後略)」
- 23 忽坐上一人問曰：「孔明以曹操何如人也。」孔明視其人，乃沛郡竹邑薛敬文。孔明應聲曰：「曹操迺漢賊耳。」綜曰：「公言差矣。(中略)今曹公遂有天下三分之二，皆歸心。惟劉豫州不識天時而欲爭之，正是以卵擊石，驅羊鬪虎安能不敗乎。」

ここでの二人の発言は，どちらも二回に分かれているが，まず自ら孔明に質問し，孔明の発言を受けてそれを論難しようとするものなので，前と後の台詞で，呼び方を変えねばならぬ理由はみつからない。どうみても周瑜のように「曹公」と「曹操」を意図的に使い分けているとは思えず，単なる不統一にすぎない。

和平派の中では，張昭が中心人物なので，ここ以外にも登場し発言しているが，「曹公」と「曹操」がどちらも三回出てくる。「曹公」の例は既に例19と21に引用されている。「曹操」と呼んだ例のうち1例は例21に見える。残りは例24(9, 36ab)と例25(9, 61b)にそれぞれ1回ずつ見える。

- 24 張昭曰：「曹操虎彪也。今擁百萬之衆，借天子之名，以征四方，拒之不順。且將軍大勢可以拒操者，長江也。今操得荊州水軍，蒙衝鬪艦動以千數，浮以沿江，水陵俱下。此爲長江之險，已與我共之矣，勢數如山岳不敢迎敵。以愚之計，不如降之。以爲萬安置策。」衆謀士皆曰：「子布之言，甚合天意。」孫權沈吟不語。張昭又曰：「主公不必多疑。如降操則東吳民安，江南六郡可保矣。」

- 25 昭答曰：「曹操，豺虎也，挾天子而征四方，動以朝廷爲名。今得荊州威勢甚大。吾以江東拒曹者，長江也。今操蒙衝鬪艦何止數千，水陵並進，安可當之。愚謂大計不如且降。當圖後計。」

この二つの台詞と例19の「何況今日擁百萬之眾南征，足食足兵，威名大振。焉可敵之」は，長短の差はあるが主張はよく似ている。それは恐らく三者が『資治通鑑』建安13年の条にある次の台詞を下敷きにして書かれているためと思われる¹⁸⁾。

26 長史張昭等曰：「曹公，豺虎也，挾天子以征四方，動以朝廷爲辭；今日拒之，事更不順。且將軍大勢可以拒操者，長江也；今操得荊州，奄有其地，劉表治水軍，蒙衝鬪艦乃以千數，操悉揜以沿江，兼有步兵，水陸俱下，此爲長江之險已與我共之矣，而勢力孱寡又不可論。愚謂大計不如迎之。」

この張昭の台詞見れば分かるように、『通鑑』では「曹公」である。史書に「曹公」とあったのを、「曹操」に書き換えて利用している例は、例4の陳宮の台詞にあったので、書き換え自体はあり得ないことではない。しかし例4は、陳宮が曹操を敵と見なしているのだから、是非必要な書き換えであった。ところがこの例24、25の場合、張昭は和平派であるので、曹操に敵意はなく「曹公」を「曹操」に書き換える必要はなかったはずである。また、書き換えるなら例19も「曹操」としても良さそうなのに、そうしていないので、これも、不統一である。

以上から分かるように、呼称の意図的な使い分けと言えるのは周瑜だけで、和平派の張昭と薛綜二人の場合は、不統一としか言えない。ではこの不統一は、何が原因なのであろうか。

この不統一が示しているのは、「曹公」をなるべく避けようとする傾向である。これまでに「曹操」と言うべき箇所が「曹公」となっている例はなく、有るのは「曹公」と言うべき箇所が「曹操」となっている例のみである。三人以外の人物を見ても、和平派は、陸續に「曹公」ではなく「曹操」と言っている例がある(9, 44a)。これに対し主戦派は、例21の周瑜が唯一の例外で、他は皆「曹操」である。

このように「曹公」を避けようとするのは、曹操が『三国志演義』中では最大の敵役であったためと思われる。時代は下るが毛宗崗本を見ると、この和戦論争の箇所に登場する人物はほとんどが「曹操」と言うように改められており、「曹公」は2例を残すのみである¹⁹⁾。毛宗崗については、前節で劉備に対する自身の評価を、登場人物の台詞に反映させてしまったことを指摘したが、ここでも彼の曹操に対する悪感情が登場人物の呼称を換えさせてしまったことになる。嘉靖本においても既に「曹公」を避けようとする傾向が見られるのは、初期の段階から曹操に対する悪感情は存在しており、それが「曹公」と呼ぶことに抵抗を感じさせたためと思われる²⁰⁾。

ただし「曹公」を避けようとしたのは作者ではない。『三国志演義』では、和戦をめぐる論争は呉だけでなく荊州でも行われている。こちらでも、主戦派の李珪の台詞には「北可以敵曹操，南可以拒孫權」(8, 71b)と「曹操」であり、和平派は次の例27、28に示すように「曹公」であって「曹操」はない。

まず蒯越の台詞（8,72b-73b）。

27 越曰：「逆順有大體，強弱有定勢。今曹丞相南征北討，以朝廷爲名，主公拒之，以人臣而拒人主，逆道也。此名國危，一也。主公以新造之楚，拒抗中原百萬之師，此爲勢危，二也。主公勢弱必求救於玄德以援之。量玄德何足以禦曹公。若使足禦曹公，則玄德安肯居於主公之下哉。此號身危，三也（後略）。」

続けて王粲は次のように言う（8,74b-75a）。

28 粲曰：「天下大亂，豪傑並起，在倉卒之際，強弱未分，故人各各有心耳。（中略）今將軍自度，何如曹公邪。」琮曰：「吾不如也。」粲曰：「如某所聞，曹公乃人傑也。（中略）將軍若聽粲之言，捲甲倒戈，應天順命，以歸曹公，彼必重待將軍（後略）」

しかも、この二人の台詞は、例24、25と同様史書に抛り所があるが、張昭の場合と異なり史書の「曹公」をそのまま受け継いでいる。

例27に史書でこれに最も近いのは『資治通鑑綱目』建安13年の条の次の記述である（13,109ab）²¹⁾。

29 蒯越等曰：「逆順有大體，強弱有定勢。以人臣而拒人主，逆道也。以新造之楚而禦中國，必危也。且將軍自料何如劉備。若備不足禦曹公，則雖全楚不能以自存也。若足禦曹公，則備不為將軍之也。」

例28は、『三国志』「王粲伝」注に基づいている（598）。『通鑑』には該当する台詞がない。

30 粲曰：「天下大亂，豪傑並起，在倉卒之際，強弱未分，故人各各有心耳。（中略）將軍能聽粲計，卷甲倒戈，應天順命，以歸曹公，曹公必重德將軍。（後略）」

この荊州での論争を見れば、作者に、本来主戦派は「曹操」、和平派は「曹公」と書き分ける意図があったことは明らかであり、呉の和平派に見られる呼称の不統一は、作者以外の人物が書き換えてしまったとみるべきである。

呉の文武諸官の台詞について、嘉靖本と『史伝』を比較してみると、両者の間で一致しないのは例19、24、25とここまで引用していない諸葛瑾の台詞の4箇所のみで、それ以外は全て一致する。両者が一致している箇所については、嘉靖本や『史伝』以前の段階で既にそのような本文になっていたはずであるので、陸績及び例22、23の張昭と薛綜が「曹操」と言っていることは、嘉靖本以前の時期に書き換えられていたと考えられる。

但し嘉靖本と『史伝』に不一致が見られる残りの四つは、この両者どちらか

の書き換えとすることになる。例24, 25に引用した張昭の台詞が、『史伝』では「曹公」になっている。史書の「曹公」をそのまま踏襲しているのは、例27, 28の蒯越・王粲の台詞と同じ扱いであるので、この箇所はもともと『史伝』のように「曹公」であったはずであり、嘉靖本の「曹操」が書き換えであると思われる。残る二つ例19の張昭の台詞中の一つと諸葛瑾の台詞は、嘉靖本が「曹公」で『史伝』が「曹操」になっている。この二つはどちらも「曹公」の方が適切であり、『史伝』が書き換えてしまったと考えざるを得ない²⁹⁾。

恐らく嘉靖本の段階で既に書き換えられていた箇所は、複数の人間の不注意が徐々に積み重ねられた結果であろう。書き換えられた箇所が、特定の場所に集中してではなく、各所に散在していることがそれを物語っている。嘉靖本と『史伝』の双方に、新たに「曹公」を「曹操」に書き換えた箇所があることは、両者は既にある不統一の上に、どちらもさらにあらたなものを付け加え、不統一をさらに増やしつつある、逆に言えば「曹公」減少傾向はまだまだ続いているということである。毛宗崗本に「曹公」がほとんど無くなったのは、この「曹公」減少傾向の最終的な結果と言えるだろう。

D 終わりに

以上いくつかの呼称の不統一を取り上げて分析した結果、不統一には作者が利用した資料の呼称をそのまま受け入れ緩やかな統一で満足している場合と、転写の過程で意図的或いは不注意によって書き換えてしまった場合の二つあることが分かった。緩やかな統一であることを知れば、作者がどのような資料を利用して作品を作り上げたかを知ることができる。転写の際に発生した書き換えについて知らなければ、『三国志演義』本来の姿は見えてこない。呼称の不統一は一見すると些細なことではあるが、ひとつひとつ立ち止まって分析してみる価値のある現象なのである。

たとえば、次の例31も、気になる不統一のひとつである。

- 31 玄德曰：「吾知陶恭祖乃誠實仁人君子今受此無辜之冤。」孔融曰：「況玄德乃漢室宗室。今曹操不仁殘害百姓倚強欺弱，逼勒陶使君至急。（後略）。」
玄德曰：「劉備非是推辭，（後略）。」孔融曰：「吾與陶恭祖有一面之舊，（後略）。」玄德曰：「劉備願往。請文舉先行（後略）。」

これは孔融の救援に成功した劉備が、今度は陶謙を救援すべく孔融と相談をしている箇所（3, 7ab）であるが、孔融ははじめの台詞で「使君」、後の台詞

で字の「恭祖」とを使っている。ここは玄德との一連の会話である。話をする相手が変わったため呼び方を変えることはあるかもしれないが、同じ人物との会話で特に理由もなく人の呼び方を変えるとすることは普通では考えられない。しかもここでは劉備も「恭祖」と呼んでいるのであるから、「使君」はなおさら不自然である。

劉備が孔融と陶謙を救援したことは『三国志』にもみえるが、この箇所は、史書に対応する文章を見つけれない²³⁾。ただ「使君」と字はどちらも敬意をもった言い方であるので、誤写ではなく緩やかな統一の例と言えそうである。

まずこの前後で陶謙がどう呼ばれているかみてみよう。例31は、陶謙が、彼の部下が曹操の父を殺してしまったために、曹操の攻撃を受け、孔融に救援を求めたが、孔融も攻撃を受けていたので劉備に救援を求め、劉備はまず孔融を救い、次に陶謙を救う。すると陶謙が劉備に徐州刺使の地位を譲ろうとするというかなり長い話の一節であるが、発端の陶謙が曹操に攻撃された箇所では、「使君」が一回(2,75a)、「府君」が二回(2,76a)使われている。「府君」と「使君」はこの外に、例31の少し後劉備と孔融が救援方法について相談している箇所(3-9a)に「使君」が一回、最後の陶謙が劉備に徐州刺使を譲ろうとする箇所に「府君」が一回使われている。一方「恭祖」は、例31以外では、やはり孔融が「吾與陶恭祖最是厚交」(3-3a)といているのが有るのみである。「使君」と「府君」が行政長官の呼称とすることで同一視してよければ²⁴⁾、こちらの方が標準的な呼称であり、たった二回しかも孔融のみが使っている「恭祖」は特殊とすることになる。

例31を、緩やかな統一と見れば、この話には、どのようなものかは不明であるが、先行する物語が存在し、作者は、史書と同じように、これを利用しながら、この箇所を組み立てており、根幹をなすのは「使君」系統で、「恭祖」系統は後から挿入されたのではないと思われる。

この陶謙の受難に始まり、かれが劉備に徐州刺使の地位を譲ろうとするところで終わるこの物語は、もともと劉備が陶謙を救援し徐州を譲られると言うだけの話であったのではないと思われる。小説における話の展開を見れば分かるように、陶謙→孔融→劉備と救援依頼がつながり、劉備は孔融を救った後陶謙を救うというのは、不自然で同じことの繰り返しとしか思えない。一つの話をもつに増やすと言うことは、『水滸伝』でも、元曲では祝家莊攻撃で晁蓋が死ぬことになっていたのを、もう一つ曾頭市の話を増やしこちらで死ぬことにするという例がある。また陶謙が徐州を譲る話は、「有老将陶謙、臨死三讓徐

州與玄德。」と『三国志平話』⁹⁾にも言っているのです、かなり早い時期から存在していたはずである。これに対し、孔融は『三国志平話』や元曲の三国志劇ではなじみがない存在であって、先行する物語があったとすれば彼が登場していた可能性は低い。

孔融の救援が付け加えられたのは、恐らく次のような事情からであろう。『三国志』「先主伝」を見ると、陶謙が死に麋竺がその遺言に従い、劉備に徐州を譲ろうとすると、劉備は断ろうとし、その場にいた陳登と孔融が、受けるべきであると助言したことになる。その助言の内容は、袁紹を貶め劉備を持ち上げるもので、使いたい台詞である（『三国志演義』では、実際に利用されている）。しかし北海の太守である孔融が、理由もなく徐州にいるのはおかしい。幸い、劉備は孔融も救援したことがある。そこで、いささか不自然にはなるが、この二つの救援を結びつけた。

以上まだ簡単な分析に過ぎず、この推定が正しいか否かについては、まだ慎重な調査が必要であるが、この箇所の不統一が、たちどまって検討してみる価値をもつことは確かであろう。

- 1) 引用は『明弘治版三國志通俗演義』（新文豊出版公司 民國68年）による。
- 2) 張飛も「益徳」と字で呼ばれることがある。たとえば「諸葛亮火燒新野」(8, 76 b-83a)には、二箇所見えている（「孔明喚益徳」、「益徳領計去了」）。しかし彼については、そのほとんどが姓名で呼ばれているので五人の中に含めなかった。
- 3) 「『三国志演義』の生成」『中国文化』59号（2001）19-26。
- 4) 引用は『三国志通俗演義史伝』（関西大学出版社 1998）による。
- 5) 「嘉靖本以前の『三国志演義』」『中国文化』60号（2002）24-34、「史書と『三国志演義』」『文芸言語研究』49文藝篇（2006）1-26。
- 6) 曹操を初めて「丞相」と言ったのは許褚であるが、この箇所に嘉靖本は割注を付け「那時人稱爲丞相只是稱大將軍後建安三年纔任丞相」(3, 62a)と言っている。『史伝』は、本文扱いになっているが、ほぼ同文を載せている(2, 14a)。嘉靖本以前の段階で呼称に気をつける人物がいたことは確かである。
- 7) 『三国志』（中华书局 1959）「呂布伝」注, 227。
- 8) 『三国志』「呂布伝」注, 228。
- 9) この話は『資治通鑑』（中华书局 1956）建安3年の条（2006-07）にも見えるが、陳宮と呂布の登場する順番が逆であるうえ、文字も若干異なるので、『三国志演義』が利用したのは『三国志』の方である。
- 10) 『三国志』「呂布伝」注, 229。
- 11) 『元刻讲史平話集』（北京图书馆出版社 1999）第五冊25ab。
- 12) 『史伝』では許褚、張遼の台詞は「皇叔」となっている。曹操は後に見えるように劉備を弟扱いしているので、曹操の部下である二人も「玄德」よりもより鄭重に「皇

叔」と言う方がふさわしくも思える。ただ、劉備が皇叔と認定されてからここまで、曹操の部下が劉備を「皇叔」と呼んだ例がないので、『史伝』の方が書き換えている可能性もある。

- 13) この箇所に限らず曹操の謀臣たちは、劉備を危険人物と見なし好意を持たないので、ほぼ一貫して「劉備」と呼んでいる。
- 14) 『三国志演義』(中华书局, 1995)201。
- 15) 『三国志演義』207-08。
- 16) 『三国志演義』223-225。
- 17) 確かに、嘉靖本のように曹操の部下である許褚、張遼が「玄德」と呼ぶことは、ふさわしくないように思われる。この箇所『史伝』(2, 67a)では、「皇叔」と呼んでいる。
- 18) 『資治通鑑』2089。

なおこの台詞は『三国志』「周瑜伝」にも見える。ただし次のようになっており、『通鑑』のほうが『三国志演義』本文に近い。

議者咸曰：「曹公，豺虎也，然託名漢相，挾天子以征四方，動以朝廷爲辭，今日拒之，事更不順。且將軍大勢可以拒操者，長江也。今操得荊州，奄有其地，劉表治水軍，蒙衝鬥艦乃以千數，操悉浮以沿江，兼有步兵，水陸俱下，此爲長江之險已與我共之矣。而勢力單寡又不可論。愚謂大計不如迎之。」

また『資治通鑑綱目』(同入堂蔵版 1808年重鐫)13卷115a では、次のようになっており、例24は『通鑑』よりもこちらの方がさらに近い。

張昭等曰：「曹公，豺虎也，挾天子以征四方，拒之不順。且將軍大勢可以拒操者，長江也。今操得荊州水軍，蒙衝鬪艦乃以千數，悉以沿江，水陸俱下，此爲長江之險已與我共之矣，而勢力單寡又不可論。愚謂大計不如迎之。」

- 19) 「曹公」は、虞翻と薛綜の台詞に1例ずつ残されている。『三国志演義』484-85。
- 20) この和戦論争に相当する箇所を、『三国志平話』(『元刻讲史平話集』第五冊41a-44a)と『三国志事略』(『元刻讲史平話集』第六冊42a-44b)で見ると、若干の出入りはあるが、前者は孔明は「曹公」、呉の人々は「曹操」と言うことが多い。後者は人による違いはなく話の前半は「曹公」、後半は「曹相」がほとんどである。曹操をどう呼ぶかは、平話の段階から問題があるようである。
- 21) この台詞が翻越のものらしくとれるのは、『綱目』のみである。

『三国志』「劉表伝」(214)は、傅巽の台詞としている。

巽對曰：「逆順有大體，強弱有定勢。以人臣而拒人主，逆也。以新造之楚而禦國家，其勢弗當也。以劉備而敵曹公，又弗當也。三者皆短，欲以抗王兵之鋒，必亡之道也。將軍自料何與劉備。」琮曰：「吾不若也。」巽曰：「誠以劉備不足禦曹公乎，則雖保楚之地，不足以自存也。誠以劉備足禦曹公乎，則備不爲將軍下也。原將軍勿疑。」

『通鑑』(2082)は、翻越と傅巽等の台詞となっている。

章陵太守蒯越及東曹掾傅巽等勸劉琮降操曰：「逆順有大體，強弱有定勢。以人臣而拒人主，逆道也。以新造之楚而禦中國，必危也。以劉備而敵曹公，不當也。三者皆短，將何以待敵。且將軍自料何如劉備。若備不足禦曹公，則雖全楚不能以自存也。若足禦曹公，則備不爲將軍之也。」

- 22) なお『史伝』では、嘉靖本と曹操の呼び方が異なる。呉の文官と舌戦する場面では、嘉靖本が七回とも「曹操」と言っているのに対し、『史伝』は「曹操」が三回、「曹瞞」が三回、「曹賊」が一回で、より厳しい言い方をしている。また例21の周瑜が偽って和

平論を述べた後の箇所では、孔明に常に「曹公」と言わせている。これは孔明も周瑜に調子を合わせ降伏した方がよいと述べているので、周瑜と同じように「曹公」と言わせたものである。『史伝』は嘉靖本より古い姿を留めていることもあるので、孔明のこの呼称の使い方も嘉靖本が直してしまっている可能性もある。但し「曹瞞」については、「曹操」も残っているので、『史伝』のほうが書き換えたのではないかと思う。

- 23) 劉備が孔融を救ったことは『三国志』『太史慈伝」、陶謙を救ったことは『三国志』『先主伝』に見えるが、それぞれ別の話として記録されている。
- 24) 『三国志演義』では、時々郡と州の区別が曖昧になることがあるので、州の長官を指す「使君」と郡の長官を指す「府君」の区別も曖昧になっている可能性はある。また陶謙が刺使の地位を劉備に譲ろうとした場面では、劉備を「使君」といっているので、これと区別するために「府君」と言っているのかもしれない。
- 25) 『元刻讲史平话集』第五冊20b。